



磯貝實さん

王 伝統の手技

第十一回

古くは奈良の時代から 日本に入ってきたという**鼈甲細工**。繊細な海亀の甲羅を自在に操る**磯貝實さん**の技が、現代にも人の美感を伝承し続ける。

鼈甲細工は「タイマイ」以外には適さない。甲羅の背の部分1枚1枚が剥がれないからだ。その数13枚。そこと腹の部分を用いて「美」が生み出される。限りある素材で勝負する究極の職人技の世界だ。



鼈甲細工のかんざし。

熱で微妙に変化する
甲羅を仕上げていくには
職人の勘が勝負

職人は、
和を持って生きることに
尽きる

菅原道真を祀る亀戸天神から歩いて数分。閑静な住宅街の中に「鼈甲磯貝」と書かれた暖簾が目を引く。

「いらっしやい。今日はよろしくお願ひしますね」

こぢんまりした工房の奥から、作業衣姿で迎えてくれた磯貝さんは2009年、東京都優秀技能者（東京マイスター）に認定された鼈甲細工の匠だ。「鼈甲磯貝」の代表として、また弟子である3人の息子さん達の師匠として、その技術の伝承に努めている。

鼈甲は、赤道近くに生息する「タイマイ」という海亀の甲羅を素材にした日本の伝統工芸。磯貝さんによれば、鼈甲がポルトガルから長崎に入ってきたのは、おおよそ1300年前のこと。「そこから奈良、京都を経て江戸へと伝わってきたようですが、庶民の生活のなかに入ってきたのは江戸時代になってから。ただ当時も一部の金持ちしか身に付けられない高価なもので、鼈甲と称する牛や馬の骨のまがい物が多く出回っていたという話

なるほど、上品な艶と、肌に触れる柔らかな感覚を持つ鼈甲は、当時からすでに希少価値の高い贅品だったらしい。磯貝さんが鼈甲細工職人である父、庫太さんのもとに弟子入りしたのは21歳のときだ。「車が好きてチューンアップに興味があったので、高校を卒業した後、台東区内の自動車整備工場に勤めたんですが、部品の加工や改造はほとんどが分業で、何だか自分が思い描いていた物作りじゃないなあ、と…」

このまま整備士を続けていくべきか、あるいは新たな道を探したほうがいいのか……。そんなとき、ふと脳裏をよぎったのが、工房で働く父の姿だった。「そのとき思ってたんですよ。なんだあ、自分のやりたい仕事があるに身近にあったじゃないか！ っつて（笑）」

最初から最後まで自分の技術が生かされて、なおかつ作った商品を手で販売できる。しかも、その技術を後世まで残せる仕事——それが伝統工芸の鼈甲細工だった。思い立ったら吉日。磯貝さんは3年間勤めた工場を退職し、鼈甲細工の世界に飛び込むことになる。

「甲羅にはそれぞれ硬さの違いがあり、色合いやキズの深さもすべて異なります。職人は指の感覚を頼りにそれぞれの条件をすべて見抜き、完成した形を想定しながら仕上げていくことになるんです」

鼈甲は人間の爪と同じたんぱく質でできているため、熱によって微妙に変化する。そのため、鼈甲を鉄板で熱した後、プレス機で圧力をかける「圧着」作業では、

「素材自身を持つニカワ成分を引き出して、それを接着剤代わりにして素材同士を張り合わせていくので、ちよつとした熱加減や圧力で、いかようにも変化してしまいます。だから、そのあたりもすべて自分の勘だけが頼りになるわけです」

磯貝さんは大半を手作業で行なうため、どの工程においても、一瞬たりと手を抜けない、まさに真剣勝負だ。だからこそ、その熟練した手作業から生み出される一品は、なんともいえないぬくもりと肌触り、品のよさを醸し出しているのだ。



⑤ 圧着：整えた各部材を水で浸し、柳の薄板で挟み、さらに熱した金板で挟んで固定しておくことで接着される。



⑥ 中削り：2枚張り合わせたものを、これを小刀などで辺や端を削って重ね目の補整をする。



⑦ こうした工程を経て、完成に必要な素材ができあがる。

その後の工程として、成形：平型を整え加温して反りなどをつけて成形していく。時絵：時絵を必要とするときは、下絵を彩漆で描き、その上に金粉などを蒔き、漆風呂に入れてから乾燥させる。彫刻：彫刻を必要とするときは、彫る図案を下書きし、彫刻刀で彫りあげ、砂バフなどで磨き上げる。象嵌：象嵌を必要とするときは、模様を描き、金または銀の薄板をつなぎ合わせ、金板を使って埋め込んでいく。仕上げ：磨き粉をつけて下磨きを行ない、さらに油分をつけて磨き、光沢を出して仕上げる。



① 生地取り：作る製品に合わせ、甲羅に形を描いていく。



② 切り出し：糸鋸で線に沿って切り出していく。



③ 粗削り：ガンギやヤスリ、小刀で甲羅に付いた傷などを削り落として整える。



④ やすりかけ：粗削りしたものをとくさやサンドペーパーで磨き表面を滑らかにして接着しやすくする。



鼈甲細工に使用する基本的な道具。上は鼈甲の素材。道具は糸(弓)鋸、小刀(キズ取り、成形)、ガンギ(キズ取り)、メタバ(ガンギの手入れ)など。その他、圧着の工程で使用する鉄板とコテ。磨く工程でのとくさ、サンドペーパー。型打ちや削り、成形の工程に使うあたり台。仕上げ用の砥石などが用いられる。



現在はカリブ海で獲れたタイマイが、色も明るく柔らかいので人気という。

は限られた資源であるため、「正直、失敗を恐れず、どんな作れ!」とはなかなかいいづらくてね(笑)。だから、彼らには、先代が残してくれた素材を大切に使う気持ちを忘れないように、とだけ伝えていきます」

そんな磯貝さんの座右の銘は「和を持って生きる」こと。「人付き合いも仕事も、一番大切なのは『和』ですからね。今後、息子達もそれぞれに独立していくかもしれませんが、どう生きてもいけませんよ、兄弟の和だけは大切にしてほしい。そんな気持ちで後世に残る仕事をしてほしい」

「先代から受け継がれた匠の技と「限られた資源」を大切にする心。それが今、磯貝さんから息子達に伝承され、新たな物作りへの精神を生みだしているようだ。」

※加工しやすい天然素材として、古くから工芸品や装飾品の材料に利用されてきた鼈甲が、一般に普及したのは江戸時代。櫛、かんざし、帯留めのほか、徳川家康が使っていた眼鏡にも鼈甲が使われていた。鼈甲は人の体温により微妙に変形する性質を持つため、眼鏡の鼻当てに使用するとかけた人の形にピッタリとフィットする。

磯貝 實

Isogai minoru



1948(昭和23)年、東京生まれ。子供の頃から物作りが大好きで、高校卒業後は自動車整備工場に就職。だが、部品を改造する仕事は、「素材から完成まで」という自身の描くもの作り。ではなかったことから、同工場を3年で退職し、勲六等瑞宝章を授与された数少ない職人である父・庫太さんに弟子入り、鼈甲細工職人となる。23歳で独立、東京・駒形に「鼈甲磯貝」を出店。ところが1992(平成4)年のワシントン条約によるタイマイの輸入禁止を受け、業界を激震が襲う。現在の「鼈甲磯貝」は、92年以前に輸入した資源を大切に使いながら3人の息子達とともに鼈甲製品を提供している。東京鼈甲工芸品工業協同組合理事長。江戸の伝統工芸協同組合専務理事も務め、2009年には東京マイスターに認定。都立大江戸高校では伝統工芸実践課程で講師を務める。江東区の無形文化財保持者でもある。

鼈甲磯貝：

- 工房／東京都江東区亀戸3-32-4
TEL:03-3682-4405
 - 浅草オレンジ通り店／台東区浅草1-21-3
TEL:03-3845-1211
 - 亀戸天神鳥居前店／江東区亀戸3-3-6
TEL:03-5628-1244
- <http://www.5e.biglobe.ne.jp/~bekko/>

鼈甲細工職人となって23年目を迎えた1992年。業界を襲ったのがワシントン条約によるタイマイの輸入禁止だった。「ただ、ワニや一部の爬虫類のように、即刻全面禁止ではなく時間をかけて徐々に、ということだったので、最初のうちは皆、のんびり構えていたんです」

だが、輸入量が減り始めると

「不思議なもので、息子が3人、感性は三者三様。私の頃は父から教わったかんざしやブローチなどが主だったんですが、息子達はシユガーポットやカード入れなんかも木型から作って、どんどん新しい商品作りにチャレンジしています」と磯貝さんは得たりやおうの表情だ。

とはいえ、タイマイそのもの

自動車整備工から鼈甲職人へ。身近にあった、自分の天職



タイマイの甲羅を磨く。

材料の買い占めが始まり、材料を確保できた職人と、そうでない職人との間に大きな差が生まれた。

「幸いうちの場合は、父が材料をある程度確保してくれたおかげで助かったんですが、なかには廃業を余儀なくされる業者も少なくありませんでした」

以来、10数年。磯貝さんは限りある資源を大切に使いながら、鼈甲細工と向き合ってきた。

そして今、その思いと匠の技は、弟子である3人の息子達にもしっかりと受け継がれている。

大学3年で弟子入りした次男剛さんに続き、長男克実さん、三男大輔さんも同じ道を歩み、現在はそれぞれが実演販売を行ないながら直売店を切り盛りしている。